

考えるようになってきた。もちろん、科学の営みについては、男女の区別はなく、扱う問題も方法論にも区別はない。量子論に男性用、女性用があるはずがない。しかしながら、感性の相違が（ひょっとしたら単なる個人差かもしれないが）生み出す着想の豊かさのようなものがあるのではないか、と思うのである。

私の研究室の卒業研究学生が6人いる（通常は1,2名なのだが今年は異常に多い）が、男子学生4名、女子学生2名である。ミーティングで議論をするとき、ICUの伝統で学生同士はfirst nameで呼び合っており、活発である。様々な意見がでてくる。活発な意見交換は、もちろん男子学生同士でも、日本人だけでも可能ではあるので、多様性がどれだけ意味を持つのか、何とも言いようがないが、他の大学に出かけたときに感じるあの「単調さ」は、どこか学問のありかたにも影を落とすのではないか、と思うのである。

坂東さんが、女性が現在の男性のように頑張るのではなく、むしろ、男性にとっても女性にとっても、食いしばって生きていかなければならない、という世界を変えようではないか、というのに私も賛成である。さらに言うならば、アカデミックな場では、男性だけ、日本人だけというのは、やはり発想を貧しくするように思われる。また、男性、女性がいるところ、日本人、外国人がいるところでは、その多様性を生かすべく、互いによく話を聞くことが大切である。

じつは、物理教室で、これまで、日本人4名、外国人1名であったのを、3:2にする案を提案したとき、学内でもかなり抵抗があった。外国人を多くすると、それだけ日本人教員の負担が増える、という理由であった。国際性を謳うICUでさえ、そのような反論が出てくるのである。この抵抗を振り切るにはICU設立の理念は何であったか、将来の理想の大学は何か、学問にとって多様性は必要か、といった理念の再確認を行うことも必要であった。それは大変であったが、過ぎてみると、大学全体が物理教室の案を巡って根本的な議論したことは大変意味があったと思うのである。

国際化、多様化をしようと思えば、様々な conflict を覚悟しなければならない。その多様性こそ文化創造のために必要条件である、という確信を持たなければ、conflict を克服できない。数字目標を掲げて男女共同参画を提唱する場合、単に、男女平等、機会均等を旗頭にするだけでは、おそらくうまくいかないであろう。むしろ、学問のあり方、知のあり方、という観点から、男女共同参画は必要なのだ、ということを確認したい。

子育ての時代から久しくなるが、子供が小さいときのことでもはっきりと覚えているのは、一方の親が叱るときに、子供はもう一方の親をみる。常に、二つの人格の間で子供は育つ。これが、子供の精神発達に重要な意味を持つように思う。これを敷衍すれば、教育の場で、異なる人格、異なる性、異なる人種、異なる文化が共存するところで、我々は発想の豊かさを獲得できるのではないか。

## 『ICUの国際化について』

北原和夫

最近「国際」という名前を冠した大学、学科名が全国的に多く見られるようになって、高等教育の国際化が意識されるようになったが、実態はどうかというと必ずしも国際化が進んでいるわけではない。ICUに着任して、教授会が通訳付き、議事録等公文書が英語である、という状況に慣れてきたところであるが、そうすると、逆に国立研究所の運営協議会に外部委員として出席するたびに、協議会のメンバーが日本人だけであるということに違和感をもつのである。サイエンスを推進する機関の意思決定が、日本人だけで行なわれているのである。実は、ごく希な例外を除いて、国立研究所の教授は皆日本人である。客員教授等の外国人教官はいるが、研究所の意思決定に責任をもって参与すると言う意味での外国人教授は皆無の状況である。考えてみると、研究のCOEとしての国立研究所が、研究面では国際的であっても、研究所の行方を決める意思決定の場が非国際的である、というのはおかしい話である。

私は前任校である国立大学において、専任教官の任用を国際公募で行なおうと思ったことがあった。その考えはいろいろな事情で結局支持を得られず、日の目をみなかった。理由の一つは、もし外国人教員を採用したら、その採用に関する全ての行政的負担がその講座あるいは学科の教官に掛かってくる、ということである。任用に関わる公募、ビザ取得に関する法務省や外務省との事務連絡、外国人登録、家探し、子弟の学校保育園探しに到るまで、採用を決定した department が全てを行なわなければならない。つまり、外国人職員を採用するためのインフラが、学内になかったのである。実は、国立研究所がなぜ外国人教官を採用しないかという、まさにここがネックであって、外国人を採用することによって派生する行政的負担が日本人教官に重くのしかかることによって、本来の研究推進の業務が損なわれることを恐れるからである。

その点、ICU には、創立以来 50 年にわたる経験の蓄積が、事務部にも教員にもある。このことは大変重要である。少なくとも、外国人採用を決めた department が孤軍奮闘するという状況ではない、ということである。もちろん、ICU が日本にある限り、日本語の入学試験問題作成、物品の購入等における外部業者との交渉、地域社会との連携などの場面で、日本人教職員が外国人教員に代わって行わなければならない仕事がある。したがって、効率という観点だけからすると、教職員が日本人だけであるに越したことはない。意思決定においても、通訳は不要であるし、同じような文化や感性をもつ単一民族からなる集団のほうが効率的に動けることは言うまでもない。しかし、ICU は敢えて、国際化の道を選択したのである。それは、言語、文化、感性の異質なものが作り出す厄介さ、不協和音、ストレスを覚悟の上で、むしろそのような非均質性が生み出す文化の価値を尊ぶがゆえに、国際化の道を選んだのである。これが、ICU が「実験」であると言われる所以である。

本学の教育理念に「リベラルアーツ」が挙げられている。リベラルアーツとは *Critical thinking* に始まって、考え行動する知性を涵養する教育であるとされている。私は、さらにこれに「知的社会性」を加えたい。学問の発展は、一人一人の研鑽の努力によらなければ実現しないことは言うまでもないが、それだけでは不可能である。知的発見の喜びを伝え共有し、それに到るまでの困難を共にする社会性が必要である。

先般の白川氏のノーベル賞受賞の背後にアメリカの研究協力者の励ましがあつたことは周知のことであるが、そのような大きなことでなくても、われわれの日々のアカデミックな営みの中で、社会性は重要である。私は若き日に研究員として MIT にいた。共同研究者は、ユダヤ系で東欧から国を捨ててきた化学者であった。まず、私の物理学のバックグラウンドと彼の化学のバックグラウンドからして異なり、方程式の表し方からいちいち議論をしなければならなかった。また、彼の履歴からして強烈な反共主義であり、日本も核武装すべきだ、などというものだから、絶対平和主義だった私は、研究の合間の寛いだ雑談のときでも激しい議論から逃れられなかった。よって、論文に仕上げるのにも、日本人の物理学者との共同研究よりは遥かに多くの時間と精力を消耗したのであるが、出来あがった論文は、物理学界でも化学界でも、アメリカでも日本でも読まれることになった。また、彼も私の平和に関する考えを深く尊重してくれるようになり、そのことも何かと周辺に伝わっていった。十年ほどして、彼がアメリカの永住権を取得したことを機会に、日本学術振興会の招聘事業で彼を日本に呼んだ。彼は日本が平和な国であることに感嘆し、私の平和についての考えを少し理解したようであった。彼を通して、私の化学界との付き合いも深まり、研究の領域もやや化学よりに広がってきている。

このようなことから、私は、もし ICU がシステムやインフラの改革をする機会があれば（たとえば、今提起されている本館の改築などにおいて）、第一に考えるべきことは、知的社会性を促進するような整備を行なうことである、と考えている。つまり、教員と学生が「アカデミックな時間」をたっぷり共有できるようにすることである。実は、初めて理学館にきたときに、私はフォアイエ（二階中央の広間）に目を見張った。そこでは、学生たちが自習をしたり歓談しているのが、教職員は脇を通るたびに顔を合わせざるを得ない、という構造になっている。つまり、時間と空間を自然に共有できるように意を注いだデザインになっている。実は、昨年 Worth 先生が 50 周年記念で来校されたときにそのことを話したら、正にそうだ、と言われた。

時間の共有という観点からしても、本学の学内礼拝は、リベラルアーツの根幹である。そこでは、教職員、学生がそれぞれ心にある真実を語る。それを参加者が共有する。教室や日常の場で

は、中々語り尽くせない思いを原稿という（同時通訳のために前もって原稿提出することが求められる）整理されたかたちで語る。職種、立場、民族、言語を超えて真実を共有する営みが毎週続けられている。このことが、本学を底から支えているのである。現在、学内礼拝に参加する教職員、学生数が少ないが、もし、時間的制約などがネックとなっているならば、早急に改善すべきである。本学の基督教主義は、リベラルアーツ、国際主義とリンクして、職種、人種、言語を超えた知の共有を促し、さらに知を力たらしめるものである。このことは、神が嘉し給うことであって、広い意味での伝道となるのである。